Osaka University Knowledge Archive

Title	コペンハーゲンキャビネットメーカーズギルドによる展覧会について
Author(s)	多田, 羅景太
Citation	デザイン理論. 2019, 73, p. 70-71
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/71190
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

コペンハーゲンキャビネットメーカーズギルドによる展覧会について

多田羅景太　京都工芸繊維大学

20世紀中頃を中心に，デンマークでは数多くの優れた家具がデザインされた。小国デンマークにおいてこれらの家具が短期集中的に誕生した背景の一つとして，1927年から1966年にかけて毎年開催されたコペンハーゲンキャビネットメーカーズギルドによる展覧会が挙げられる。この展覧会は，コペンハーゲンを中心とした家具職人組合が，販売促進を目的として開催した家具見本市を起点としているが，開催を重ねる毎にデザイナーや建築家と家具職人との協働によって生まれた新作家具を発表する場として成熟していった。この展覧会については，先行研究や関連書籍において頻繁に紹介こそされているが，詳細な分析，研究が十分行われたとは言い難い。

本研究では，コペンハーゲンキャビネットメーカーズギルドによる展覧会の40年間に亘る活動をまとめた展示図録集，『40 years of Danish furniture design』を基に，各年代の参加メーカーやデザイナー，そして家具の素材やスタイルの変化などについて分析を行う。本図録は家具デザイナーであり，インテリア雑誌『モビリア』の編集長としても活躍したグレーテ・ヤルク（1920-2006）が中心となってまとめたものである。ナチス・ドイツによって統治された第二次世界大戦期間中も途切れる事無く開催された展覧会を開催年，会場，メーカー，デザイナー，素材，写真，当時の新聞記事からの抜粋などの情報によって詳細に記録した本図録は，20世紀中頃のデンマーク家具デザインの変遷を客観的な視点で俯瞰する上で最適な資料といえよう。本研究ではこの図録の情報をデータベース化し，それを基に詳細な分析を行った。

キャビネットメーカーズギルドとは家具職人組合を意味する。デンマーク語ではスニーガラオ（Snedkerlaug）といい，その歴史は1554年まで遡ることができる。この家具職人組合は独自に店舗を持ち，富裕層を中心とした顧客への販売窓口となっていたが，同時に製品のクオリティにばらつきが出ないよう品質管理も行っていた。さらにはこうした役割に加えて若い職人の学びの場としても機能していたのは注目に値する。

デンマークの家具職人育成システムはマイスター制度と家具職人組合がうまく役割を分担しながら機能していた。マイスターは家具職人の親方として品質の高い家具を製作する傍ら，優れた技術が途絶えないよう若い家具職人を育成することも大変重要な役割であった。具体的には職人としての実務的な技術指導は親方が行い，一方で製図法や材料の買い付け方，そして帳簿の付け方など，工房の経営に必要な知識ついては組合が夜間授業を実施して教育した。このバランスのよい育成システムのおかげで，若い家具職人はマイスターとなるための技術と知識の両方を効率よく身に着けることができたのである。

デンマークの家具職人はマイスター制度によって培ったクラフトマンシップを活用して長らく富裕層を中心とした国内向けの家具を製作してきたが，1920年代に入ると海外からの安価な家具や工場で量産される粗悪な家具が流通し，従来の市場を奪われ始めた。そこで，長年受け継がれてきた技術の高さを消費者にアピールすることを目的に企画したのが

キャビネットメーカーズギルドによる展覧会である。

展覧会場はアクセルボーやテクノロジカル・インスティテュート，コペンハーゲン産業協会など暫くの間転々としたが，1939年以降は工芸博物館に落ち着いている。また40年の間に，のべ78名の家具職人と230名以上の家具デザイナーや建築家が参加している。

本展覧会は，家具デザイナーや建築家と家具職人が協力することにより，数多くの名作家具が生み出された場として知られているが，当初から両者の協力が盛んに行われていたわけではない。長年作り続けてきた富裕層に向けた家具ではなく，デザインを一般市民に開放することにより社会的な格差を無くすというモダニズムの考えに基づいた家具を作ることに，多くの家具職人は抵抗を感じたと推察できる。また，海外から入って来る安価な家具に市場を奪われつつある状況の中で，需要があるのかどうか分からないモダンな家具を作ることに対し，後ろ向きだったともいえよう。そのため展覧会初期の1920年代後半から30年代前半にかけては，家具職人自らがデザインした，決してモダンとはいえない家具が数多く展示されていた。

しかし時代の変化をいち早く認識した一部の家具職人達によって，家具デザイナーや建築家と組んでモダンな家具をつくるという新たな可能性が試行された。この試みを後押ししたのが1933年から導入されたデザインコンペティション制度である。これは展覧会に先立って公募した家具のデザイン案を家具職人が実作し，展覧会に出品したものである。このコンペティションによって，展覧会は若い家具デザイナーの登竜門として発展した。

しかしながら，全ての家具職人がこの時代の変化に追随できたわけではなかった。一部の職人は家具デザイナーとの協働を拒否したり，取り組んではみたもののうまくいかず，途中で展覧会への参加をやめてしまったケースが複数存在することが，データベースからも確認できる。

一方で開催を重ねるにつれ，家具デザイナーと家具職人が協働して作品を制作し，出品しているケースが増加していったことも本研究で明らかになった。

加えて出展作品の材料にはウォルナットやオークの他に，現在はワシントン条約などによって流通が制限されているマホガニーやチーク，そしてローズウッドといった高級材も頻繁に使われていたことも分かった。このような高級材を用いた家具は当時のデンマーク人にとっても当然高価なものであり，特に戦後の不景気の中，若い人々にとってなかなか手が届くものではなかったはずである。また，大規模な家具工場における大量生産ではなく，家具職人による少量生産であったこともデンマークのモダン家具が高価なものとなってしまった要因だといえよう。

キャビネットメーカーズギルドによる展覧会において生み出された数多くの家具は，世の中の新しい動きに敏感で，かつ経済的にも余裕があったデンマーク中流階級以上の人々を中心に受容された。また海外においては，工場で生産された無機質な量産品が溢れていたアメリカを中心に，高いクラフトマンシップにより作られたデンマークスタイルのモダン家具が高く評価され，フィン・ユールやハンス・ウェグナーがデザインした家具を中心に大ヒットしたのである。この海外での人気が70年代以降の衰退期の引き金となってしまったのは皮肉なことだといえよう。